

ウエディングドレスを着た花嫁の涙

おそらく、介護の現場ほど頻繁に感謝の言葉が交わされる職場はないでしょう。中には、職員が戸惑ってしまうほど、伏し拝むようにして感謝の気持ちを表現する方もいます。

特別養護老人ホームで8年間、勤務しているユニットリーダーの女性は、学校を卒業して働き始めたころ、入居者から想像もなかったほどに感謝され、介護という仕事の大切さをあらためて認識したそうです。涙を流して喜んでくれたのは、80代の女性でした。

あるとき、入居者同士の昔話に耳を傾けていた彼女は、その女性が結婚式を挙げていなかったことを知りました。ともに入居してい

た夫が小さな食品店を経営していたため、若いころは早朝から深夜まで働きづめの毎日、結婚式を先延ばしにするうち、やがてタイミングを逸してしまっただけでした。

じゃあ、いまからやりましょうよ――。

その女性は笑ってとり合おうともしませんでした。彼女は本気で、施設内に反対する声はなく、夫婦の長男も賛同したため、その数カ月後には施設で結婚式が行われました。その日は、花嫁の誕生日でした。

ウエディングドレスを着た花嫁は、恥ずかしそうな表情で入居者と職員から祝福を受けました。あきらめたはずの夢が叶ったと実感したのか、感極まった花嫁は彼女の手をおしただくようにして感謝と喜びを伝えたそうです。

本物のおもてなしの心

どの介護施設も、ご利用者を喜ばせるために工夫をこらして、さまざまなイベントを実施しているようです。関西のある特別養護老人ホームは、ご利用者の満足度が高いことで知られており、良質なレクリエーションが評判になっています。

これまでに実施したイベントの中でも、とくに評価されたのが「喫茶店」でした。これは施設内にかつての純喫茶を再現するイベントで、レンガ風の壁紙と薄暗い照明で、昭和の雰囲気 연출 したそうです。そして、レトロな衣装に着替えた職員たちがメニュー表を手にして接客を担当し、本格的な器具を整えて、少しでも喫茶

店の味に近づけるように努めました。

もともと、職員の多くは平成生まれで、昭和の純喫茶の雰囲気を知りませんでした。若い職員たちは、ネットで検索した純喫茶の動画や古い喫茶店の画像を参考にしたそうです。それほど入念に準備したのは「大人のためのイベント」を実施したいという施設長の意向でした。

施設長は、入居型の施設の場合、そこはご利用者にとって生活の場となるため、とくに子ども騙しのようなレクリエーションは通用しない、といいます。

「大人の鑑賞に堪えるレベルでなければ、人生の大先輩に心から楽しんでいただけません。たとえ手作りでも、本物を志向するおもてなしの気持ち大切です」